

9. 地域との協調・コミュニケーション

9.1 環境美化活動

(1) キャンパスクリーン作戦

キャンパスクリーン作戦は、大学の教育環境の維持・保全と学生・教職員の環境保全意識の向上を目的として、吉田・小串・常盤の主要3キャンパスにおいて（毎年夏秋2回）行っています。

また、学外の地域清掃作業と連携して同時期に作業を行うことで、地域とのコミュニケーションの一体化を図り、地域における大学の共存を推進していきます。

この度は、天候にも恵まれ、滞りなく作業を完了することができました。（図9-1）



図9-1 キャンパスクリーン作戦風景等

(2) 植栽の維持管理活動

■ 業務支援室は、支援員・技術指導員・スタッフ計24名で構成され、山口大学の障害者雇用推進の一環として2010年度から設置されています。

環境に関する活動としては、構内の清掃や花壇の管理が主な業務であるが、その他にも学内書籍の配送や各部署との連携業務など多様な場面で活躍しています。

花壇の管理では、古い花卉の摘み取り作業を定期的に行っています（図9-2）。通りかかった皆さんには、少しでも長い期間、花を觀賞してもらい、季節を感じたり大学生活の活力に繋げて頂きたいと思えます。

■ 環境整備班は、施設環境部の特命職員・臨時用務員の計2名で構成され、吉田キャンパスの環境美化について主に活動しています。

業務は、植木の剪定、芝生の管理、植え込みや駐車場の除草、植物の病害虫駆除、ハス池などの維持管理を行います。（図9-3）

暑い季節も寒い季節も毎日作業は尽きませんが、本学のイメージカラーである「緑」のある大学環境の維持と地域や学生・教職員のために清々しい汗を流しています。



図9-2 古い花卉の摘み取り作業



図9-3 共育の丘への山道整備

(3) 附属学校の活動

総合的な学習の時間「明るい未来をつくろうプロジェクト」

「明るい未来をつくろうプロジェクト」では、本校生徒の一人ひとりが自分の住んでいる街や自然に対してどのようなことをしていくことが明るい未来につながっていくのかを追求しています。

その学習活動の一環として、日頃通学でお世話になっているJR光駅周辺の清掃や、光市の象徴でもある虹ヶ浜周辺の清掃活動をするようになりました。

具体的な活動を行ったのは、光市でも猛威を振るった集中豪雨の後でした。集中豪雨の影響で虹ヶ浜周辺はたいへん多くのゴミが漂着しており、充実した活動を行うことができました。（図9-4）

いっぽう、JR光駅は集中豪雨の影響で、この時期電車が不通になっており、バスを利用する客しかない閑散とした状況でした。その分生徒たちは、日頃はただ通り過ぎるだけの駅構内を、じっくり時間をかけて清掃することができました。（図9-5）

このような活動の他にも、本校では「附属光中学校ボランティアプロジェクト」も通年で実施しており、多くの生徒がボランティアとして登録し、市内各地で奉仕活動や環境美化活動に取り組んでいます。来年度からはコミュニティ・スクール活動も始まります。地域の中で、地域と共に歩みを進めることを通して、いろいろなことを学んでいってほしいと思えます。

附属光中学校



図9-4 海岸のゴミ拾い



図9-5 光駅清掃活動集合写真

9.2 公開講座

地域未来創生センターでは、一般市民を対象に公開講座を開講しています。

2018年度は29講座を開講しました。そのうち環境に関する内容を取り入れた講座や、地域に赴いて実施した講座について、3講座を紹介します。

■「今日から始めるグリーンライフ」 (4月20日、6月29日、9月14日、11月30日開催)

自分で育て収穫した農作物を味わうと、おいしさと一緒に「安心」を実感することができます。

この講座では、本学附属農場において、作物栽培に必要な基礎知識や昆虫と上手につき合う栽培方法等に関する講義を実施し、また、土壌作り、たい肥作り、野菜の苗作り等の技術実習を行うことで、農作物の栽培や農的な暮らしに関する知識・技術や自然のつきあい方などについて学びました。



図9-6 技術実習風景

■「あなたを救う地質の知識（活断層編）」 (5月14日、5月28日、6月4日開催)

災害から身を守るためには、防災用品だけではなく、なぜ災害が起こるのか？についての基礎知識を備えておくことも必要です。

この講座では、地震や土砂災害といった地質災害に関する知識や、防災に対する自主的な応用力について学びました。また、山口県内の活断層について学んだのち、実際に見学することで、活断層をより身近なものとして感じることができました。



図9-7 活断層の見学

■「小麦栽培から始めるパンづくり（前編）」 (6月4日、8月22日開催)

パンの主原料である小麦粉の大半は、外国産の小麦から作られています。

この講座では、本学附属農場で栽培している山口県が奨励するパン用小麦品種「せときらら」を収穫し、その粉でパンを焼くというプログラムを実施し、地域でとれた農作物を地域で食べる「地産地消」の取り組み、食の安心・安全などについて考えました。



図9-8 小麦収穫風景

9.3 キャンパスガイド

山口大学構内には楽しいスポットや、歴史的なスポットがたくさんあります。

偶数月第2土曜日に「地域の方々に山口大学をもっと知ってもらおう」「大学と地域のつながりを深める」「学生がガイドすることによって地域と学生とのつながりを深める」ことを目的として、学生スタッフによる吉田キャンパスのガイドを実施しています。リピーターの方も多く、ご好評をいただいています。

本学地域未来創生センターURL
<http://www.ext.yamaguchi-u.ac.jp/>



図9-9 キャンパスガイド風景

9.4 フードドライブ@山大

国際総合科学部 助教 仁平 千香子

「フードバンク山口」は2013年に発足後、2014年にNPO法人となり、「『もったいない』を『ありがとう』へ」の合言葉とともに活動の幅を広げてきました。主な活動内容は、スーパーや食品関連企業、一般家庭から賞味期限前でもまだ十分食べられるが、売れないものや消費しきれない食品を募り、子ども支援団体や高齢者福祉施設などに無償で提供し、また様々な理由で食品を必要としている生活困窮者に届けることによって、食品ロスの削減を推進し、事業者や消費者の社会的責任について普及・啓発を目指し、さらには持続可能な社会の構築に寄与することを目的としています。世界人口の増加とともに食糧危機が懸念される中、栄養失調で苦しむ地域を養うに十分以上の食糧が世界各地で廃棄されている現状があります。また過剰生産も環境破壊の大きな要因の一つです。地域での食品ロス削減を通して、人々の世界問題への関心が高まるよう努めています。

山口県立大学の今村主税（ちから）准教授を理事長とし、地域のボランティアとともに活動をしています。協力する企業も年々増え、またメディアの取材の増加により、知名度も上がってきたようで、個人からの食品寄付も日々増え続けています。今年からは食品を寄付できる「フードバンクポスト」が県内のスーパーや県庁にも設置され、個人が寄付しやすい環境が整いつつあります。

余った食品を個人から直接受け取るイベントを「フードドライブ」と言います。花博やサッカーのレノファ山口の試合会場、フリーマーケットなどのイベントに合わせて、当日イベント会場に食品を持ってきてもらう活動です。活動の場は年々増えていますが、昨年からは山口大学でも一学期に一度のペースでフードドライブを行っています。教職員への呼びかけから始まった「フードドライブ@山大」ですが、数を重ねるごとに学生からの寄付も集まるようになりました。中には数十キロの米を寄付する支援者もいます。また、この活動にボランティアとして参加を希望する学生も目立ってきています。普段から食糧事情に馴染みのある農学部を始め、その他の学部からも福祉活動に興味のある学生が続々と集まり、イベントを通して地域貢献に関する学習の場にもなっている印象を受けます。

学外でも「フードバンク山口」の活動に普段からボランティア参加する学生が山口大学には多数いますが、その中でも国際総合科学部の学生が4年次に行う卒業研究PBLで「フードバンク山口」との共同プロジェクトを希望し、来年度より始動することになりました。「フードバンク山口」の活動をより多くの人に知ってもらい支援者をさらに増やすことを目標に、意欲ある学生が立ち上げたプロジェクトです。目標の一つに山口大学内の学生支援者を増やすことを掲げており、若者の福祉活動への関心を高めたいと意欲を語っています。

NPO法人フードバンク山口

[Facebook] <https://ja-jp.facebook.com/foodbankYMGC/>

[ブログ] <http://blog.canpan.info/fbyamaguchi/>



図9-10 フードドライブ活動風景



図9-11 フードドライブ寄付品



図9-12 フードドライブチラシ